

性は充分あつたが魚群が少なかつた為投網せず夜明け点滅して退避せしめた。水温22.7度、8月15日金武洞にて操縦。尚、餌料場は水温22.2度で中層より0.5度3高目で又20年7月真大部の「水スルル」が捕獲した場合もあつて今回も予想通り集魚したので確認したが浮上せず中層以下で游泳している上に混水が着つて居り数は不明であつた。中層から表層近く迄は「ダルター」(鰯科)の幼魚が40~70斤程度火に付き表面のシイラ(20斤立)を狙つて攻撃したのでシイラも減少する一方で増える傾向は見られなかつた。又「水スルル」の浮上せなかつた理由も「ダルター」に中層された為であろう。

第2次試験

1. 期 間 自1952年8月25日 至同8月28日
2. 使用量 餌 前 同 同
3. 調査員 森 真、奥 平
4. 調査位置 第1回 長浜沿岸 第2回 久良波沿岸
5. 試験設備 前 同 同
6. 試験概要

8月25日諸準備を完了して泊港を出航同日夕刻から翌日沿岸にて餌料の集魚試験を共施日没後集魚灯点灯から10分後に表層にシイラの小群を激突いで真鱈(ミズシ)とサツベリ鰯が其の下層に約40~70斤程度の集魚があり表層近くには、沖田トウゴロ鰯の集魚も若干認められた。23時真火に落付始めたので投網して捕獲試験を施行しようとした時突然電機機の調子悪くなり点滅した為魚群は退散してしまつた。以後再び点灯して集魚状況を観察したが前回の半分以下の集魚となり投網する迄には至らなかつた。翌26日同位置にて再び集魚集魚率及魚種は初回と同様で若干「ダルター」も見受けられた。23時50分投網午前0時5分の観測で総計約50斤程度捕獲13時迄待受網内にて活魚試験実施0時5分から13時迄約12時間に亘つて活魚状態を観察したが其状を認めなかつたので全餌料を海浜に投棄した。8月27日餌場を久良波沿岸に移動して試験開始日は日没から夜半迄に「ヤビナギ」真鰯、サツベリ鰯等計約40斤程度集魚したので0時50分投網して捕獲試験を実施したが潮流が速く網底りが動く其の上台風雲米の先光とあつて風波が次第に高まつて来たので操縦上支障を来たし揚網を失敗して魚群を逃散させてしまった。その為試験を続行する予定の各海上要報が危しられた為操縦打切り那網港に向つた。

2. 海洋観測

日 日	号 測	天候	雲量	風向	風力	波長	波高	水温	気温	水温	水深	位 置
8月25日	14-10	B0	7	SSB	3	2	2	5	24.5	24.1	24.57	金武洞
8月26日	13-35	B	1	NNE	2	1	1	4	24.0	24.4	24.39	長浜沿岸
8月27日	9-15	B0	4	E	3	2	1	4	24.8	24.4	24.18	久良波沿岸
x	18-50	B0	3	E	3	1	1	4	24.5	24.9	24.22	x